
君と見る明日

みちひろ ^ ^

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と見る明日

【Nコード】

N5843S

【作者名】

みちひろ^^

【あらすじ】

親友と起こった、ある夜中の事件。

それから2人で見た朝。そして次の日もまた2人で朝を迎える。

（注意：BL&エロ含みます。嫌いな方は私の別作品をどうぞ。）

BLについては処女作です！！駄文で申し訳ないです（汗）

（前書き）

＼短編7作目＼

BLについては処女作です！！駄文で申し訳ないです（汗）
また、かなりの「BL」&「エロ」だと思うので、本当に嫌いな人は読まないようにしてください。また、批評・感想は随時募集します。

「んフツ・・・ダメ、そこはやめ　ろっ！！！」

ガスツと蹴り上げるとようやく離れたそれ、酔ってて抵抗力が落ちてるからってまさか親友にこんなになされるとは思ってた。しかも、自分より弱いと思っていた可愛い系の男にだ。

「うつ・・・」といって、壁に背を持たれてうずくまっているのがその男、クスキアラシ久須木嵐。

奴の目は、まるで本能をむき出しにした獣そのものだった。

そして閉じていた瞼が持ち上がり、フツとこちらを睨まれば背中を冷たいものが通った。

それから戸惑うことなく、また、ベットへと体を寄せ、俺の横にく。

さっきの足蹴りが最後の力を振り絞った渾身の一撃だったために、俺の体はもう動かなかった。

それなのに、嵐は何もなかったように上から俺を見降ろした。

俺は、その今まで見たことのない顔を見たくなくて、顔を横に向けて視線を外した。

先程までの行為のおかげで、ふたりは衣服を身に着けておらず、すぐにさっきの続きが始まる。

嵐の舌が、俺の身体中を這い、嵐の口からは

「智樹^{トモキ}……。」

と俺の名が出る。

その声ですら今までに聞き覚えのない、いつもより低い声だった。

さっき蹴った時はその口が丁度、俺のものを含みだした時だったから、今の嵐の顔にはあざがある、それが今の状態と相乗的に俺を興奮させる材料になってしまった。

だから、その舌が胸の突起をかすめた時に、俺の口からも聞き覚えのない、女のような、猫のような声が出てきてしまった。

「あれ？感じた？」

と挑発的な声に、羞恥で顔をそむけたままの俺はさらに腕で顔を隠した。

それが気に入くない嵐は、強引に左手で腕をどかし、右手で顔を嵐に向かせる。

すると、舌を出し、ぺろりと口をなめる嵐の顔がはつきりと見えてしまい、俺は泣きたくなった。

「ああ、もとから感じてたか、智樹はエロイもんねえ。」

とあざ笑いに似た声を出す。

その声も、今の俺には甘い蜜のようで、自分のものが少し大きくなってしまう。嵐はすかさず、

「フフッ、何もしてないのに大きくなるなんて、変態以外の何ものでもないね。」

と耳元で囁く、その息が直にかかってやばい。

なんてことだ。俺がこんなことになるなんて、しかも嵐に犯されるなんて。

「ねえ、智樹。まだ始まったばかりだよ？」

なんて言った嵐の顔が、また本能に従う戦士に変わる。

それから、また俺のものを口に含みだした。

「ダメダメダメ！やめて、やだ・・・おねがい、もう！」

「はひほ、はへほっふえ（なにを、やめろって）？」

と口に含まれながら喋られれば、もう限界はとうに超えていた。

それでもイかないのは、俺のプライドがまだ少し残っていたから。

それなのに嵐は、まだなめ続ける、それから最後にジュルルルと吸われれば、男のミルクが嵐の口へと流れ込んだ。

嵐はそれを、口からネトーと垂らし自分の手の中に収める。

「う、めん。」

と俺が言つると同時くらいに、嵐は口に残つたものをゴクンと音を立てて飲みほした。

「はは。智樹のは濃くて、量も多いな。さては、自分で抜いてないでしょ。」

ハハハと笑いながら嵐は手に取つたものを軽くのばしてから、いつのまにかうつ伏せにされた俺の尻へと塗りたくった。それから穴へと指と液をいれる。

「はひっ・・・!!!」

と声をあげればケタケタと笑いを交えて、

「ほら、ローションがなくてもこんなに進むよ。」

と中指をぐるぐると掻き回して言った。

普段は出すことが専門のそこからは異物感が流れ、グネグネとうねる指がある一点をとらえた時にそれらの全てが快感へと変わった。

その俺は、一瞬

「きゃあーーーーー!」

と悲鳴に近い声を上げた後、ピクピクと痙攣を起こし持ち上げられた腰に、いくらやっても力が入らなくなった。

「あれ?そんなに気持ちかった?まだ指1本だよ、ハハハ、大丈夫?」

などという嵐に心配する気持ちなどさらさらなくて、

「もう1本突入ー！」

なんて楽しそうな、戦隊ものを見るガキのようなテンションで薬指が追加された。

1本目はなんとか耐えられたが、2本目となるとさすがに痛すぎて、

「痛いー！」

と叫んでしまった。

それなのに、嵐は止める気配もなく、その2本を器用に回していた。さっきの一点だけを触らないように。

「なん、で・・・？」

とかすれ声で言う俺の声は届いただろうか。すると、

「なにが？」

という声が返ってきた。が、本当のことは言えない。言えないと思っていたのに、俺のプライドは一回目の絶頂でどこかに吹き飛んでしまったらしい。

「なんで、一番いいところ触ってくれないんだよ！」

「なんだあ、バレてた？」

とニタニタ笑い、続けて

「一番いいところってここかなっ！」

と言うと同時に、さっきまで触れなかった中指がゴリツと前立腺をひっかく。

「いやぁー——！」

といった時には、俺のものからは2度目の白濁が溢れていた。

「あゝあ、布団汚しちゃった、最低え。」

という嵐の顔は見えないけど、笑っているんだろう。それから、少しして何も考えられなくなっていた俺に、嵐のとどめのような声が聞こえてきた。

「あ、智樹。気づいてた？指4本入ってるんだよ。」

嵐の指は両手の人差し指と中指が収まり、その器用に動く4本をキユキユウと締めつけていた。

ぶつちやけ、もう何も考えられなくて、ただ一つ思ったのは「もう入らない。」だった。

「いま、もう入らないと思ったでしょ？」

と聞かれ、そんなことないと言おうとしたのに、その前に俺の穴が嵐の指をギュツと締めつけた。

途端に、指が抜かれ、そのことにすら快樂が流れてしまう。

「あつ……………」

「ハハ、まさかお尻の穴で返事するなんて、正真正銘の変態さんだなあ。もう。」

と、手をぶらぶらと振りながら言う。

「そんな変態な智樹にはおしおきしないとだね。」

キャツキャツと笑う嵐に怖くて、目を向けられない。

うつ伏せになった俺の背中を、嵐の腕と胸とが這うように密着し、最後には嵐のものが俺の双丘にピッタリとはさまり嵐の顔が俺の肩にのっかった。

ドクンドクンと脈打つ嵐の塊が、もろに伝わり、その熱さに身も心も溶けてしまっんじゃないかとさえ思えた。

それから嵐は、

「お仕置きその1。」

と言って、俺の右肩に後ろからカブリと噛みついた。痛すぎて涙があふれ、血がトロつと垂れるのがわかった。

「なんか、ドラキュラになった気分。智樹から出るものは何でも美味しいね。」

と言つて、喉を鳴らし

「その2。」

と言つて、今度は仰向けにした俺の鎖骨を噛む。

ガリといった後でもまだ歯を外さずに、そのままガリガリと噛み続け、離れた時にはくつきりと誰が見ても間違いない歯型がついていて、

「ふふふふ。そそるねえ。」

なんて嵐が言いやがった。のに、もうその顔が愛しくなりだしている自分もいた。

「まだ、お仕置きは終わってないよ。」

とニコツと笑うと、今度は嵐のものを近づけて、

「舐めて。」

と言うと同時に、俺の頭を鷲掴み、俺には拒否権がないことを確認させられる。

それでも口が開かない俺に、いかげん切れた嵐は、俺にビンタをくらわした。

「うつ。。。」

と唸る俺の顔には5本の指の跡が残るほど強く叩かれた。

「早く、舐めろよウゼエな。」

と嵐の言葉とは思えない言葉を聞いてしまったら、もう何も考えずに嵐のものをむさぼった。

「やればできんじゃない。」

と笑う嵐と、ボロボロと涙の止まらない俺。

一生懸命に口に含み舐めていると、嵐からも感じている甘美な声が漏れ始め、

「んフ、はぁ・・・もう、いいぞ。」

と言って、頭から手を外した嵐。この情事がもう終ったんだとホツと肩を撫で降ろしたのもつかの間、俺の脚を仰向けのまま高く持ち上げられ、そこにあらわになった穴。さっきほぐしたというのに、お仕置きたちのせいで、元に戻ってしまったそれは、到底、嵐のものなんか入らないのに。

「こつちでいくに決まってるでしょ？」

と普段の声を出せば、なんとか可愛らしく見える嵐。でも言うてる

もしれない。

のに、次第にそのピストン運動も快感へと変わっていく。そんな自分が信じられない。

「あつ・・・ふ、うん・・・あん・・・あん・・・あん・・・あん・・・」

もう感じている声しか出ない。それに気づいた嵐のピストンがどんどん速くなっていく。

「あああああああ、だめ、そんなに・・・速く、しないで。」

と言う言葉も今の嵐には届かず、聞こえてきたのは

「智樹の中、最高。」

それから右肩と左の鎖骨にある血の出る歯形を舐められれば、不覚にもイってしまった。

それと同時にキュウウウと締めつけた俺の中で、嵐も果てた。

「今日から智樹は、俺だけのものだから。」

と言った嵐は、俺の身体中にびっしりとキスマークを付けながら、俺の後処理もせずに眠ってしまった。

俺は、お風呂に行き、中に出されたものをシャワーと指で掻き出せば、甘い声が自然と漏れる。

風呂から出てもまだ、嵐は眠っている。

このまま服を着て逃げ出せばよかったのに、俺は裸のまま嵐に抱きついた。

いつの間にか好きになってしまった。信じたくない気持ちを胸に、そのまま眠りに落ちた。

こうして、嵐と朝を迎えるなんて夢にも思ったことがなかったけど、朝の嵐はいつもの嵐に戻っていた。

「昨日はごめんね。」

なんて言う嵐にかけられるのは、罵声。

「痛てえよ馬鹿野郎。腰痛くて立てないし、本当に、人が酔ってたからって、ろくでなし！ばか！」

「でもよかったでしょ？」ニコニコ

「次はちゃんと優しくしろよ。」

「へへへッ、わかった。」

「あと、噛みつくの禁止、痛いから。」

「ええ、どうよっかなあ。」

「どうしよっかじゃねえ！！」

と愛のチップを仕返しとばかりにやってやれば、涙目になった嵐。

「そんな顔したってダメなもんはダメ。次やったら、もう寝てやんないから。」

「じゃあ、噛まなかったら、いくらでもやってくれるんだあ。」

ニタニタ笑う嵐に、俺は顔を真っ赤に染める。

それから、嵐は本当に噛まなくなった。

いつまでも一緒に朝を迎えられるように。

嵐からの束縛は日に日にエスカレートしていくんだけど、それも実は嬉しかったりする。

俺は親友とのHから始まる恋も悪くないと、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5843s/>

君と見る明日

2011年8月1日21時51分発行